

上大納の
左義長

大野郡 和泉村



上大納の左義長

「左義長は、火祭りであってドンド焼きではない。和泉村上大納では、ドンド焼きはしていない。」（谷口新作氏、長崎衛氏）

それは、村人が文字が上達するように、手仕事がかまうことができるようにという願いから「書き初め」や「つつみ」を持ちより左義長の火祭りにその願いを託すとともに、その行事に参加することによって無病息災を願ったり、家の無事平安を願ったりする年の初めの行事である。

以下、日本の左義長としての言い伝えや、古老から聞いたことを参考にしながら上大納の左義長についてまとめてみたいと思う。

1. 由来について

ア 「天の岩戸」の神話にちなんだところがある。天照大神をお迎えして村人みんな、ことし一年の幸せを願い合うとともに、お互いに「あけましておめでとう」とあいさつをかわし合った。（長崎 衛 氏）

イ むかしむかし、村人を苦しめた大ムカデを左義長の火で焼きほろぼしてしまうという伝説もあった。

「むかしむかし村のまわりの山を七まわり半もする大ムカデがいて、村人を苦しめた。その大ムカデを左義長の火で焼き殺してしまう。左義長の芯となる内側のわらをしばりつける縄の形、また外側の杉葉をしばりつけてある縄の形は、その大ムカデの形に似せている。ムカデの足があるように、わらの切り株を約20センチメートルぐらい出してなっていく。また、左義長をしばりつけるその縄が七まわり半であるのも大ムカデの伝説に由来している。」という。（長崎 衛 氏）

ウ 「さぎちょう」とは、「鷺鳥」を意味するともいう。しかもその鷺鳥は、経文の文字をひろい集めた尊い鷺鳥であり、その鷺鳥を祀るものである。という。

むかし、この地方の寺が焼け落ちた時、その焼け落ちたあとへ鷺鳥が何回も往来した。その鷺鳥は、寺の火事の時焼けてしまった経文から焼け残っている文字をいっしょうけんめい拾い集めてその経文を守った。そのような尊い鳥を祀っているのである。と年寄りから聞いたことがある。（尾崎末吉氏・尾崎つる氏）

村の長老はこのようないわれを話してくれた。民話的でおもしろい、しかもその人たちが子供のころおじいさんやおばあさんから聞いたという。

ここで、日本の各地でおこなわれている左義長について、どのような記述があるかひろってみたいと思う。

ア 三毬杖（サンギチョウ）のあて字であることは明白である。

平安時代より新年に杖で毬を打つ行事があってその杖を三本組み合わせ、火行事の燃え代を寄せかけて作ったのがこの名の起りである。

（ほるぶ社 民俗民芸双書より）

イ 平安時代の記録には、三毬杖・三鞠打とあり、このころから小正月を中心に行われていた火祭りである。本来の意味は、屋外で正月の神をむかえ、供物をささげて人も共食し、一年の豊作と平安を祈ることにあつた。現在は子ども中心の行事として、小屋を作り正月の松飾りを集めて一定の場所で焼き、持ち寄った米やもちを食べて楽しむ。この火で焼いたものを食べると災難よけになるという。

（学研 現代新百科事典より）

ウ サイトヤキ、サイトウバライ、サイノカミ祭などの意味をもつ。「サイ」とは境界のことであり、外界に対する防衛線でもあり、人界と神界との境目でもある。この境目において、内側の安全を祈り祀るのが「サイノカミ」で、ふつう道祖神ともいわれる。地方によっては、道祖神を祭るという意味もあるようである。

（民俗民芸双書より）

エ オニノホネヤキ、オンノメ（九州）

オニというのは恐るべき霊、悪霊のことで、その悪霊をトシガミ（歳徳神）の威力によって焼きはらうという意味をもつ。（民俗民芸双書より）

和泉村上大納のムカデ伝説とも似かよっているようである。

オ 左義長は歴史が古く、平安時代には宮廷行事であったが、いつしか民間に移行したものだだろう。県内の左義長をみると芯にマツやタケを5～6mの高さに立て根元をワラで固めて構築した左義長（構築左義長）を燃やすものと、子供会や若い衆が、しめ飾りやマツ飾りを一カ所に集めて焼く形式に分けられるようである。

構築左義長は、大変な労力と経費を必要とするので、明治期には沢山あった左義長も数がすくなくなってしまった。（福井県史 資料編15）

上大納の左義長も、まさしく構築左義長であり、県内で数すくなくなったものが残存しているひとつといえるが、そのつくり方や村人の願いと結びつき等については、やはりこの地域独特のものがある。その関心の強さからいって、そうたやすくなくなるものではないと予想されるが、現にこの周辺でも下大納は止めてしまったし、下山地区でも隔年に実施するようである。

ここで、県内の左義長をひろってみることにする。(福井県史 資料編 15 民俗)

ア 美浜町山上

1月14日の午後子供たちが、各戸からマツ飾りやしめなわを集めてくると、世話方がタケなどで小さい小屋を作ってその中に収める。夜中の12時を過ぎると火をつけて焼く。この火でモチを焼いて食べるとナツヤミ(暑さ負け)しないと書き初めが高く上がると字がじょうずになるという。この灰をからだに塗ると、マムシにかまれぬという。

イ 小浜市小屋

2月14日の夕方若い衆が三つの組に分かれて(カイトゴト)キツネガリをするその後4メートルほどのタケを1.5m間隔くらいに4本立て、燃えやすいようにワラを敷き、その上にしめ飾りや門松をのせる。そして15日朝ドンド焼きをする。

ウ 武生市文室ふむろ(終戦後なくなった)

2月15日に若連中が左義長をした。(オショウジコ)という。マツを芯にし根元をワラで巻いた左義長を立て、女子はヒウチ、男子は習字をつるした。左義長を燃やすときは、つけ方と消し方に分かれて、なかなか火をつけることはできなかった。

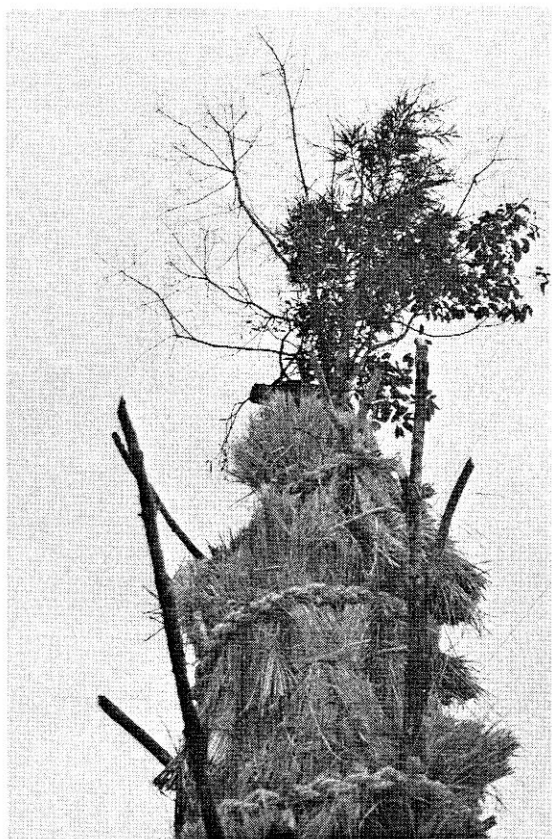
※ 上大納の「つつみ」の形が、火打ち袋の形に大へんよく似ている。武生市の「ヒウチ」はどういうものかわからないが、よく似ているのではないかと想像される。

2. 上大納の左義長

上大納の左義長について、そのしくみ等を以下にまとめることにする。さきにも述べたごとく、ここの左義長は構築左義長である。

1. 構築左義長

- 1) 芯にはナラの木を使い、枝を適当に残したものを例年おこなわれる位置に立てる。高さは一定ではないが、10 m前後である。



その芯木にワラを大人二人でやっとかかえられる太さに巻きつけ、しめ縄で七回半巻きながらしめつける。あとで点火した場合、この芯のワラがスムーズにもえていくためには、しめつけの力かげんが大切ようである。

最近、ワラが不足がちであるが、過去において、カリヤス（かやの先の細い部分）やマメガラで代用したこともあった。（かや：ススキのこと）

先端には、ヤドリ木（ホヤ）とサカキの枝を、あきの方向にさす。

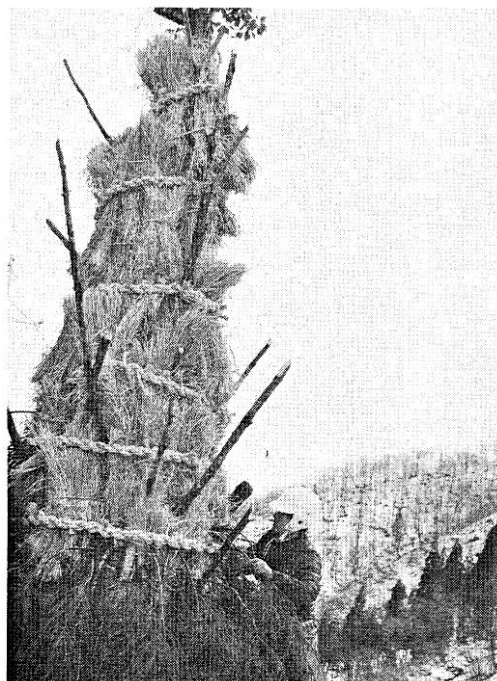
（あきの方向：後述）

2) 巻きつけた芯のワラに杉葉をさし込んでいく。

下では、取って来た杉の小枝を更に仕事しやすいように形をととのえる人たち上では全体の形をととのえながら、わらに小枝を差し込んでいく人。

このほかに山で枝を採る人、小型トラックで運ぶ人仕事は着々と進められていく。

しめ縄も、もちろん同時になわれている。



3) しめ縄づくり

しめ縄づくりもなかなか大へんな仕事である。芯になるワラを巻く、細めの縄、仕上がり用の太めの縄、どれも 50 m以上の長さが必要であろう。

写真は、仕上げ用の太いしめ縄である。

ワラの株の方を、はみ出させておくのが独特のない方であるという。

左義長の高さに合わせて見当をつけながらなっていくが、巻きつけていって足りない場合は、その場でないながら足していく。



4) しめ縄で巻きつけて仕上げる。



杉の枝の差し込みが完了するころ、しめ縄づくりも完了に近づく。

できあがったしめ縄を運んでくるだけでも、何人もが力を合わせねばならない。高い所で長老が指示するとおりに巻きつけられていく。

頂上にしっかり結んだ縄を巻いていくのもコツがあるらしい。

一番最後の端を持つ者が先頭に立って急ぎ足で回る。

ナラの枝にかけながら、しっかりと七回半巻きつけられる。



5) 構築左義長の完成

「縄は左巻きで七回半巻きつける」これは、守らなければならない。

大納川と三坂谷川が合流する河原に完成した左義長である。

四隈に火つけ口がつくられる。



四隈の火つけ口から中の芯のわらにもえうつり、その芯が頂上まで燃えていき杉葉は最後にもえていくのがその順序らしい。

正午ごろ完成し、午後5時からの火祭りまで、しばらくしづかに安置される。

2. 各家庭での左義長準備

ホウの木を適当な大きさに採ってきて、家で作る「つつみ」と書き初めをつるす。その仕事は、だいたい2月にはいるとすぐつくりはじめ、13日夜には完成する。

1) 「書き初め」について

習字が上手になるように、文字が美しく書けますようにという願いから書き初めをして、左義長の神火におねがいするという意味がある。

昔は、2月1日に学校で先生から教わって練習したものである。(尾崎末吉氏)
今は道場へ集まって練習しあったり、公民館活動で毛筆教室を開いて練習したり、各家庭で各人が練習して書きあげる。

昔は、左のように「日の丸」をつけたり、下の方にいる紙でかざりをつけてつるす人が多かったが、今では数が少なくなった。

つぎに、今年書き初めからひろって見たものをあげると、つぎのようである。

●
ひまつり

❀ おめでとう

気心腹口命

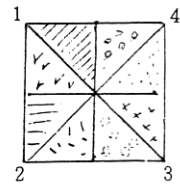
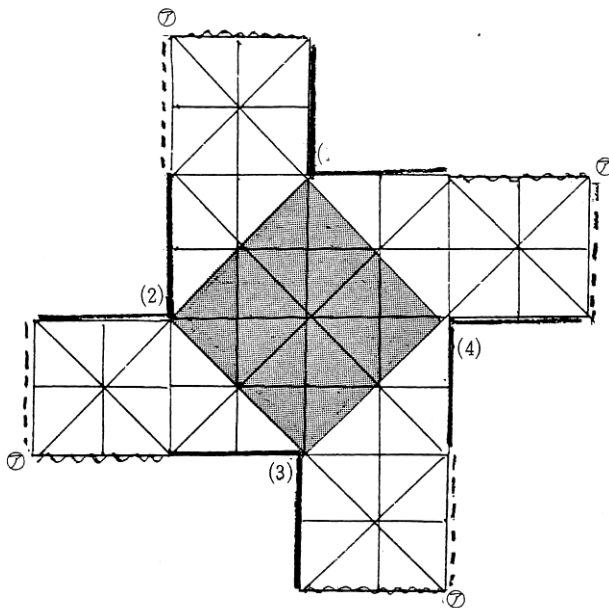
かわい子
げんきな子
ひまつり
人の事は我の事
時人を待たず
あばれんぼう
元気で仲よく
おめでとう
春のひかり
大地にいきる
わらぐつの中の神様
高山の嶺に美木なし
精神統一
希望の春
山寺水仙
夢と希望
明るい優しい子
平和な国
山ざくら
親切対話
元気でたくましく
今年こそ何かよいことある如し
元旦の朝晴れて雲なし

曆に書かれていることばや格言集からとって来る場合が多いようであるが、子供の願い、親の願い、大人の願いなど、ひとびとの素朴な願いがにじみ出ているようでもある。

2) 「つつみ」について

女子が「はり仕事」がじょうずにできるようになりますようにとの願いから、
つくるものである。

<材料> 色紙・もよう紙・昔は穴馬紙を使った。今は糸で縫い合わせているが
その昔は、麻糸でぬい合わせた。(谷口はつ氏、尾崎つる氏)

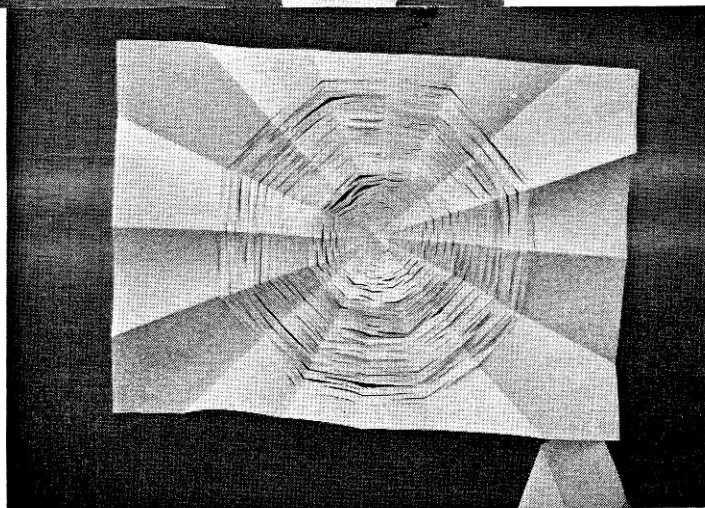
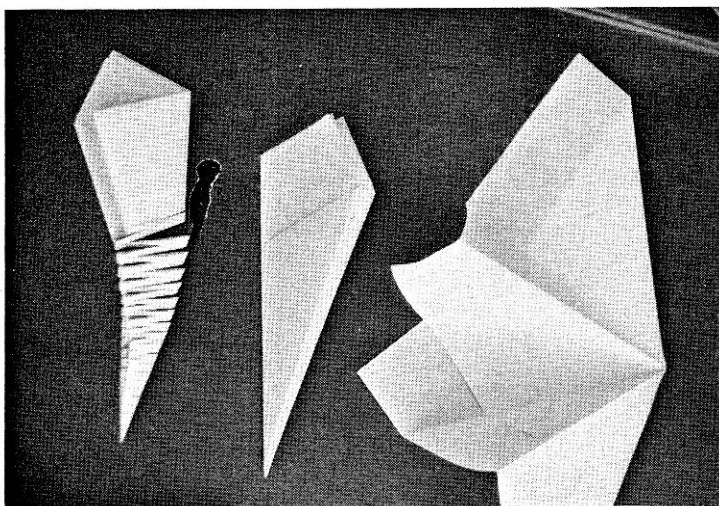
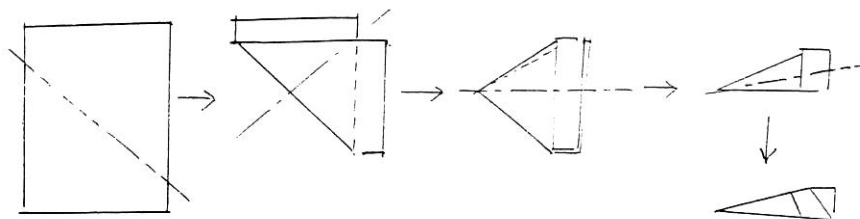


まず上図のような小さい三角形を正方形(1・2・3・4)にぬい合わせる。この三角形8まいでつくった正方形を8まいつくってこれを左の図のように並べてぬい合わせる。

上図のものを(~~~~—)が重なるようにぬい合わせていくと、
つつみの形ができ上がる。底面は上図の正方形(1)・(2)・(3)・(4)となる。⑦が
一点に集まり、そこにつつみをつるす糸をつけることになる。なお、正方形(1)
・(2)・(3)・(4)の底面の中央からふさをつける。

3) 「ふさ」について

「ふさ」の作り方を図と写真で示すと以下のようである。



このようにしてできあがったふさをつるすと下の写真のようになる。



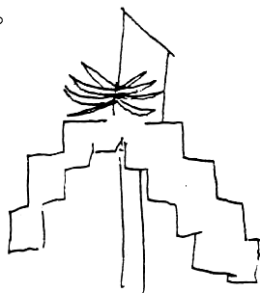
このふさをつつみにとりつけ、しばらくは家の中にかざりつけておくが、いよいよ左義長が近づくと、山から採ってきたホウの木に書き初めといっしょにしてつるす。

3. 左義長かざり

右の写真のように、木の先端には「ごへい」がつけられる。

ごへいの先端は、鳥帽子の形に「ひげ」をつけたような形をさせている。もともとは穴馬紙を1じょうで作ったが、今では半紙20枚でつくっている。

(尾崎末吉氏)



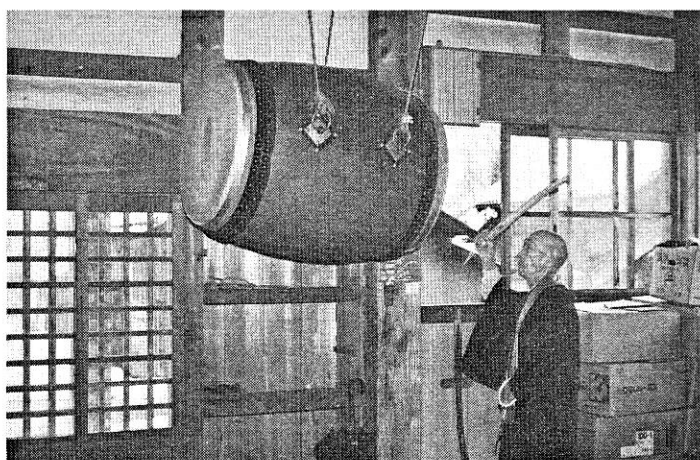
各家の左義長かざりは、13日夕刻までには仕上がり、14日には家の前の雪の山の上にかざられる。14日は、早朝より小正月行事のおめでたい雰囲気各村々にただよう。

さて、14日早朝より構築左義長づくりが村の総仕事でおこなわれていることは、さきに述べたが、それもおひるごろには完成すると、人々は家へ戻り小正月行事にはいる。

3. 道場でのおつとめ

たいこの合図で村の衆が三々五々道場に集まり、おつとめが始まる。

14日午後3時からおこなわれる。



このあと神社へおまいりする。
4時ごろにおわる。

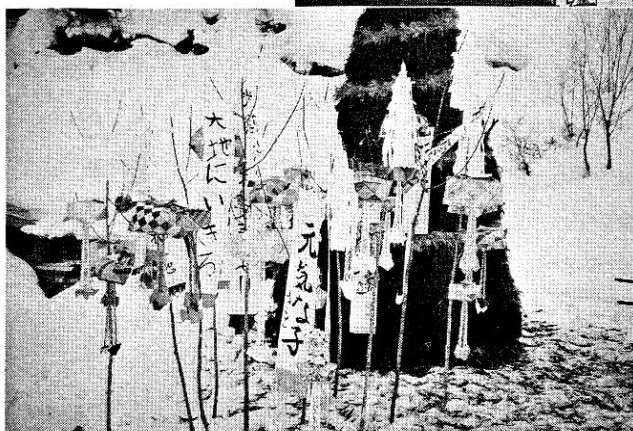
4 火祭りのはじまり

1. 河原に集合

午後4時半ごろになると、家々から「つつみ」や「書き初め」をつるした家々の左義長かざりを持って、構築左義長のある河原に集まって来る。

構築左義長のすぐとなりの広場に家々から持ち寄った「つつみ」や「書き初め」の左義長かざりが飾りつけられる。

上大納の子どもから大人まで、男も女も、それぞれみんなのねがいが、この場所にあつめられたという感じがする。



2. 「神おくり」儀式のはじまり

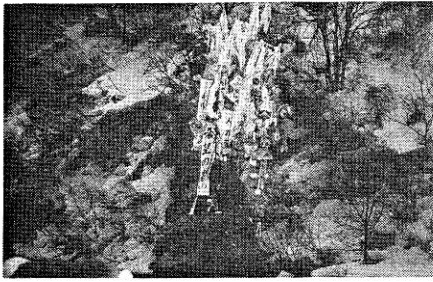
午後5時をやく過ぎたころには、「つつみ」や「書き初め」の左義長かざりも全部出揃う。そのころをみはからって左義長の儀式がはじめられる。

儀式の順序は次のとおりである。

- (1) 開会のあいさつ
- (2) 祈とう
- (3) おはらい（おきよめ）
これで一応儀式は終わる。
- (4) お神酒のふるまい
- (5) 家から持ち寄ったねがいごとの左義長かざりを構築左義長の先端部分、しかも「あきの方向」に差し込む。（かなりの所要時間）
- (6) 四隈の点火口より、構築左義長に点火する。

このころより、村の衆はざわめきが目立つ。おはやしの太鼓がドンドコ、ドンドコ打ちならされる。お酒もはいつてにぎわいがいっそう強くなる。





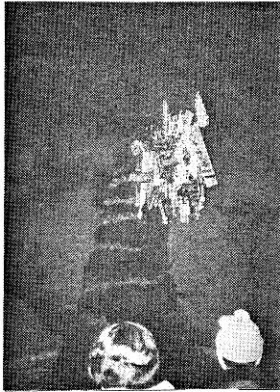
構築左義長の先端「あきの方向」
にとりつけられた村人の願い。

左上の写真は昭和62年。

左下の写真は昭和61年のものであ
る。

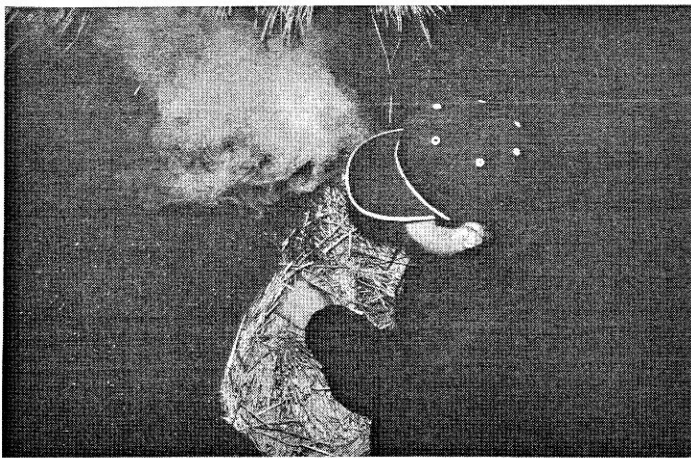
同じ方角から撮影しているが、か
ざりつける位置（方角）が少しちが
っている。

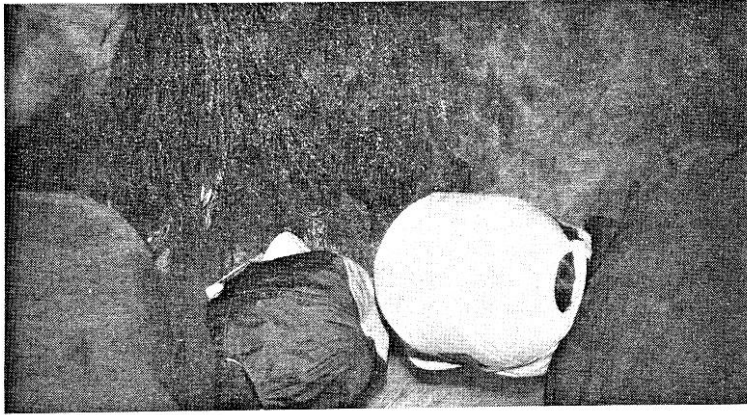
あきの方向は、暦によるが、年によ
ってことなるからである。



かざりつけがすべておわると点火する。構築左義長の下
の四隅の点火口より同時に火がつけられる。

この頃には、あたりはとっぷりと暗くなってしまう。



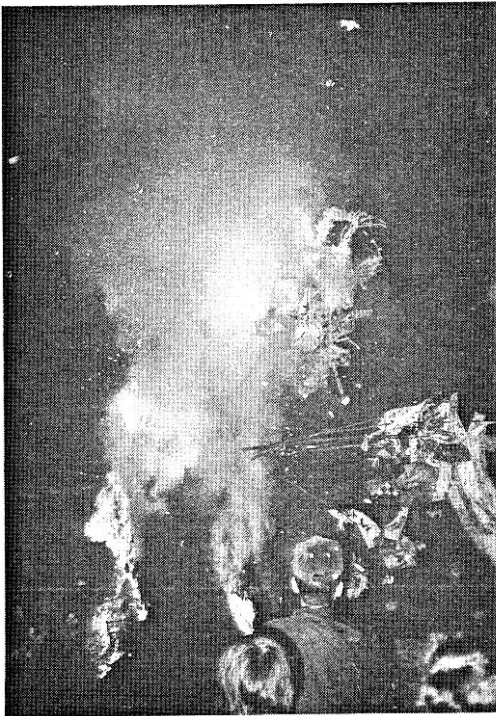


点火されてから一時間ぐらいはもえるが、村の衆は、話に花を咲かせながら、火祭りにはにぎやかになっていく。

太鼓の音もだんだんと強くなる。だれが、なにを話しているのか、大きな声がきこえる。大きな笑い声もまじってくる。

家から持ってきた餅を焼く人も多くなってくる。もち焼き網を2枚組み合わせ、その間に丸餅を5個ぐらい入れて棒につるし、左義長の火に近づけるのである。

はじめはものすごい煙につつまれた左義長もやがて、めらめらとまっかな炎がみえはじめる。バチバチと



勢いよくもえる。そして火祭りは、いよいよ最高潮が近づいてくる。

3. 人々のねがい

左義長の先端にとりつけられた「つつみ」や「書き初め」に燃えうつると歓声が上がります。「書き初め」や「つつみ」の火が高く高く上がれば上がるほど願いはかな

えられるという。(登カズ子氏、長岡とし子氏)

「つつみ」や「書き初め」は、小さな炎とともにまっ暗な夜空に消えていく――。

(自分がつくったつつみがうまくもえたか、書き初めがうまく燃えて空高くあがったか、これがとても気がかりであるという。)

一時はあんなに勢いの強かった左義長の火もだんだんとおとろえてくる。人々の心もふだんの平静さに戻る。

焼けた餅を食べる人たち。なるべくまっ黒に焦げた方が体に良いのだという。この餅を食べることによって、この一年は「病気にならない」「ハラヤミを防ぐ」という。このようにその場で食べる家もあるが、翌15日の小正月に、ぞうにとして食べる家もある。(尾崎つる氏)

昔は火ばしで堅い餅に穴をあけ、棒にさし込んで焼く方法が一般的だった。(今は金網を使っているが)(登かず子・長岡とし子氏)

そのほか、火祭りの煙にあたると無病息災になれるとか、左義長のしめ縄に手をふれると「ごりやく」があるとか、さらに、火祭りのもえ残りの焼けこげた枝を持ち帰り家の屋根にのせると、この一年火災を防ぐことができる。等々、「火祭り」に関する人々の願いはいっぱいある。

元旦を大年または大正月というのに対して15日の方を小正月という。小正月を若年といいモチイ(ヒ)ともいう。モチイとは「満月の日」という意味であり、正月のモチの日が年神祭の日として、特に重要に扱われることは当然であろう。

(民俗民芸双書)

伝統の行事ゆえ旧暦による行事になるのだと思われるが、この小正月の行事として、年神祭の日として歳徳神(あきの方=恵方)に村の人々の素朴な願いをもって祈るとともに、それを炎とともに天までとどかせようとする「火祭り」は、ことしもおわりを告げた。

5. おわりに

毎年2月14日になると、村の家々の前に美しい「つつみ」や、力作ぞろいの「書き初め」が、ホウの木につるされてかざりつけられる。そして夜は、村の衆みんなが集まって火祭りがおこなわれる。

私たちには、左義長といえば勝山の左義長バヤシやドンド焼きがイメージとしてうかんでくるが、上大納のこの左義長はまた、これとちがって素朴であり伝統的なものを感じさせてくれる。

このたび、日本古来の民俗風習としての左義長や、県内の伝統的な左義長の例をみながら、上大納の左義長をながめてみたわけであるが、歴史年代的な資料が乏しくて、その面の裏付は十分できなかつたけれど、現在おこなわれている上大納の左義長が村の人々の「夢」や「願い」に支えられながら、また、上大納の全員の人々の協力に支えられながら、たしかに受け継がれてきているし今後もずうっと存続されていくだろうということを強く感じた。

この調査にあたり、上大納の古老の方々、地域住民の方々のあたたかい声援をいっぱいいただきました。ありがとうございました。

昭和62年3月

大納小学校 小 松 英 一

大納小学校 柳 町 庄 泉

村教育委員会 大久保 征 一